

試行錯誤の日々

藤里町役場の勧めがきっかけで、4年前からりんどう栽培を行っている、淡路広光さん・悦子さん夫妻。初年度から徐々に面積を拡大し、今年は60aを栽培しています。

「りんどうは1年目に株を養成し、2年目から花の収穫となります。そのため初年度は無収入で、生育管理も手探りな部分が多く、JAの営農指導員や仲



間たちと協力しながら、栽培技術や知識を深める毎日でした。2年目は栽培圃場が水害に見舞われたほか、去年は異常気象による稲の生育遅れ等で作業が重なり、採り遅れた圃場もありました。今年はそれらの経験を踏まえ、計画的な栽培を心掛けています。」

こだわりの栽培

昼夜の寒暖差が大きい藤里町のりんどうは、他産地に比べて

花の色が鮮やかで、市場からも高評価を得ています。淡路さんは7月上旬から10月下旬にかけて出荷を行い、お盆の時期には最盛期を迎えます。

「お盆時期は、未明から花の結実や水漬け、箱詰めなどを行い、早朝の出荷に間に合わせます。そのあと圃場に行つて収穫し、翌日の出荷準備というサイクルをほぼ毎日繰り返します。りんどうは出荷時期を逃すと単価が大きく低下してしまうので、体力勝負ですね。」と淡路さん。

また病害虫防除にも気を配り、早め早めの防除で、被害を最小限に抑えるようにしています。そして淡路さんが一番こだわっているのは、他よりも早く出荷することです。

「圃場の雪投げをこまめに行つて雪解けを早め、栽培環境を整えて生育の促進を図ります。そうすることで、出荷時期を早められるだけでなく、栽培期間の拡張による品質の安定や、出荷時期の調整も行うことができるので、手間がかかりま

すが重要ですね。」

ブランド確立へ向けて

今後の目標は、1日の作業効率を上げて取り残しを減らし、安定して高品質なりんどうを出荷することです。

「他作物との兼ね合いや、今後のりんどう栽培を考えると、まずは出荷率の向上が必要だと思つています。またパステルベルなど新しい品種にも取り組んでいるので、計画的な収穫出荷を行い、『白神りんどう』のブランド確立に力を尽くしていきたいと考えています。」

